

哺乳類

(現状の解明度)

日本哺乳類学会が1997年にまとめた「レッドデータ日本の哺乳類」によると、日本産哺乳類として34科154種が記録されている。また、広島県も山地や瀬戸内海などの環境に恵まれ、広島哺乳類談話会が2000年に発行した「広島県の哺乳類」によると、17科43種が記録されている。

大型哺乳類は、狩猟の対象となったり人身や農作物に被害をおよぼしたりするので一般の関心が高く情報も多いので、現状の解明は進んでいる。一方、食虫目、翼手目、げっ歯目などの小型哺乳類は、観察しにくくあまり興味を引かないので、現状の解明はあまり進んでいない。

広島市安佐動物公園の保護記録や現地調査により、市域からカワネズミ、ジネズミ、ヒミズ、コウベモグラ、キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、ユビナガコウモリ、アブラコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ、オヒキコウモリ、ニホンザル、ニホンノウサギ、ニホンモモンガ、ムササビ、ヤマネ、ハタネズミ、カヤネズミ、ヒメネズミ、アカネズミ、ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミ、ヌートリア、ツキノワグマ、キツネ、タヌキ、テン、ニホンイタチ、シベリアイタチ、アナグマ、イノシシ、ニホンジカの15科33種を記録することができた。

(選定候補種の抽出過程)

まず、環境庁及び「広島県版レッドデータブック」の掲載種を「絶滅・絶滅のおそれのあるもの」として取り上げ、調査で得られた分布、生息特性などを考慮して選定要件を判断した。これに加えて、「絶滅のおそれのあるもの」に取り上げるほどではないが、近年個体数が著しく減少している種を選定した。

(現地調査結果)

現地調査は、山林及び谷の代表として安佐北区白木山、堂床山、福王寺山、備前坊山、安佐南区東郷山を、溪谷の代表として安佐北区宇賀峡、南原峡を、河川の代表として安佐北区河津川、吉山川を、島の代表として南区元宇品と金輪島を、市街地の代表として中区千田町などを集中的に調査した。のべ206回の現地調査を行った。

今回の調査で、オヒキコウモリの400頭を超える集団ねぐらが中区の校舎で確認された。これは国内において最大かつ、市街地ならびに人工建造物からとしては初めての記録である。また、カワネズミの生息が安佐北区宇賀峡で確認された。これは広島市で初めての記録である。さらに、安佐南区東郷山でニホンモモンガの生息を確認した。

(選定結果)

11種を選定した。内訳は、広島市の絶滅のおそれのあるもの10種(情報不足10種)、環境指標種1種である。

「広島市稀少生物調査報告」では、オヒキコウモリ、ニホンザル、ツキノワグマ、ニ

ホンジカの4種が選定されている。

前回の選定種と今回の選定種のうち、共通している種はオヒキコウモリとツキノワグマの2種である。両種とも前回の調査以降も希少種としての重要性に変わりない。とくにオヒキコウモリは、今回の調査で中区の校舎で400頭以上の集団ねぐらが確認され、これは国内において知られている唯一の人工建造物内での集団ねぐらで、その学術的価値がきわめて高い。

今回新たに選定した種とその理由としては、カワネズミはその生息地として河川改修されていない清流を必要とし、コキクガシラコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ、ニホンモモンガ、ヤマネはまとまった面積の広葉樹林を必要とし、いずれの種も分布が局地的で個体数が少ないので選定した。

ムササビは、市域の社叢^{しゃそう}にすんでいるが、生息域が分断されたり天敵であるテンの増加などの影響を受け、近年個体数が減少傾向にあると考えられるので選定した。

なお、学名は「レッドデータ 日本の哺乳類^{ほにゅうるい}」(日本哺乳類学会編)に従った。

(選定しなかった種とその理由)

「広島市稀少^{きせう}生物調査報告」に選定されたニホンザルとニホンジカは、白木山を中心とした安佐北区で増加、分布拡大傾向にあり、農林業への被害も増加の一途をたどっているため選定しなかった。

哺乳類^{ほにゅうるい}の選定種

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

- カワネズミ
- コキクガシラコウモリ
- ユビナガコウモリ
- テングコウモリ
- コテングコウモリ
- オヒキコウモリ
- ニホンモモンガ
- ヤマネ
- ツキノワグマ
- ニホンイタチ

環境指標種

- ムササビ

広島のおヒキコウモリ

これまでに広島県内で記録されたコウモリは洞窟^{どうくつ}で休息するキクガシラコウモリや、ユビナガコウモリ、森林にくらすコテングコウモリや、モリアブラコウモリなど10種にもものぼるが、生活時間帯が人とずれていることや、音もなく闇^{やみ}のなかを飛ぶこと、そして、なぜか嫌われることが多く、あえて探そうとしていないことが重なり、知名度の高さの反面、現実の姿が知られていないのが実情^{じつじょう}である。市街地^{しがいち}で見かけるコウモリは、全長7cmほどのアブラコウモリで、民家の天井裏^{すきま}や橋桁^{はしげた}の隙間などにすみついている。

おヒキコウモリは全長が14cm前後、翼を広げた大きさが40cmを上回るコウモリで、日本のコウモリ類のうち最も大きなもののひとつである。腿間膜^{たいかんまく}から尾が長く突き出しているのが特徴で、地上を移動するとき尾を引きずるように歩く様子から、「おひき」とよばれるとされる。夜間、樹冠上^{じゅくわんじょう}などの開けた空間を高速で飛び回りながら、昆虫などを捕らえ食べているらしい。近縁種は世界中に80種あまりが生息するが、国内からはおヒキコウモリと小型のスミイロおヒキコウモリ数例が記録されているにすぎない。

1990年代の前半まで、偶発的に発見されるめずらしいコウモリの代表がおヒキコウモリであった。1944年に福岡県沖で発見されたのを皮切りに、1996年春までの間に18例の報告があるが、発見場所は全国に散在し複数の個体が一度に発見された例はない。この間、発見個体は迷行と考えられ、定常的な生息自体が疑問視されていた。1996年4月、宮崎県の離島^{りしま}で岩の隙間に潜む複数の個体が初めて発見され、国内に生息することが確認された。後にこのコロニーは妊娠したメスが集団で子育てを行う「出産哺育群^{しゅたんほいくん}」であることも確認された。また、高知県でも同様に小さな離島からコロニーが発見されている。

一方、広島市周辺では1983年に広島市安佐北区高陽町の県営住宅5階ベランダで発見されたのが最初である。その後、1996年までに3例、1997年に1例、1998年に2例、1999年に1例が発見された。この7例に共通するのは発見場所が鉄筋コンクリート製の建築物であることで、とくに2例目以降はすべて学校校舎からであった。

中区南千田西町の修道学園では、1997年から2年の間に死体の発見が3例あった。この修道学園にある4階建て校舎の最上階の天井裏からおヒキコウモリの400頭を超えるコロニーが見つかったのは、1999年7月7日である。これは国内で3例目にして最大、街中で人工建造物からの発見は初めてのことである。聞き取り調査では、1970年代後半には当該校舎におヒキコウモリと考えられるコウモリがすみついていたとの情報もあり、コロニーの状態は安定していると考えられる。しかしながら、2000年度から2年計画で校舎の建て替え工事が決定されており、今後の動向が懸念される。現在のところ学校側の対応は協力的であり、生物クラブを中心に観察を続けながら、引越し作戦を計画している。

(畑瀬 淳)

ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

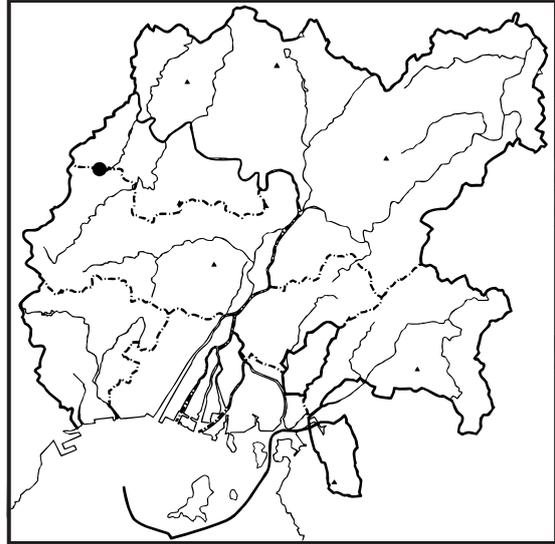
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

カワネズミ（食虫目，トガリネズミ科）

Chimarrogale platycephala

本州以南の河川上流部に生息。頭胴長103~130mm，尾長94~105mm。川沿いに巣を作り，水生昆虫や魚類，サワガニ，両生類などを食べる。

安佐北区の宇賀峡で確認した。河川改修により営巣場所が失われたり，農薬や濁水の発生による餌生物の減少などの要因で個体数が減少していると思われる。



ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

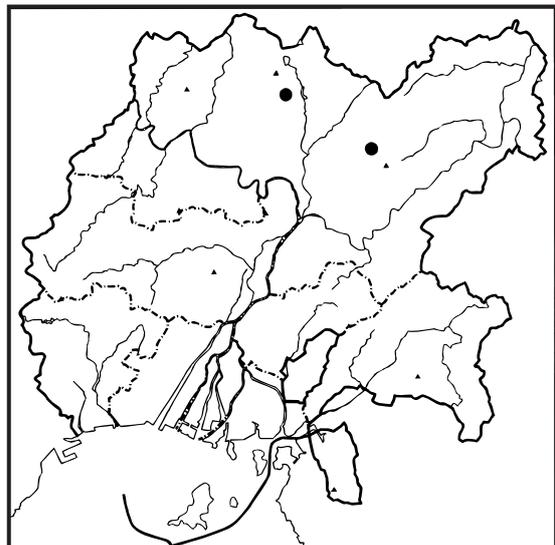
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

コキクガシラコウモリ（翼手目，キクガシラコウモリ科）

Rhinolophus cornutus

全国に分布。前腕長約40mm，体重6~10g。^{どうくつ}洞窟や廃坑をねぐらとし，群れを作る。鼻葉の形から，「菊頭」の名が付いたとされる。

安佐北区のトンネルで確認した。近隣では，呉市，佐伯郡大野町で確認されている。ねぐらとなる^{どうくつ}洞窟が少なく，生息状況は不明。



ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

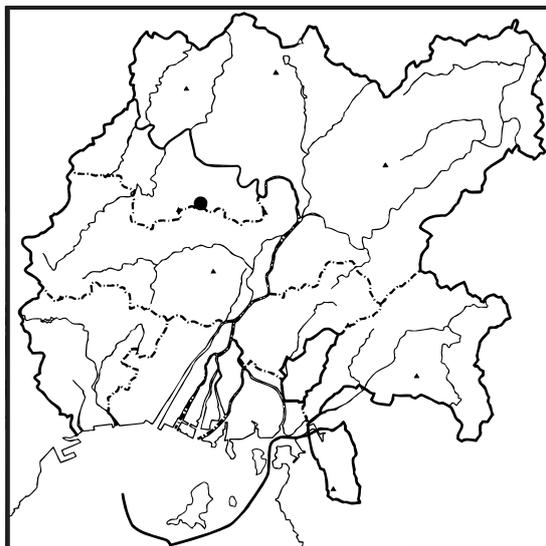
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

コビナガコウモリ（翼手目，ヒナコウモリ科）

Miniopterus fuliginosus

東南アジアに分布し，日本は分布の東端になる。頭胴長約65mm，体重10～18g，前腕長45～50mm。前肢の第3指が長く，コビナガの名が付いた。

広島市安佐動物公園で確認したが，ねぐらは不明。佐伯郡大野町や江田島，山県郡加計町で確認されているが，繁殖は未確認。ねぐらとなる^{どうくつ}洞窟が少なく，生息状況は不明。



ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

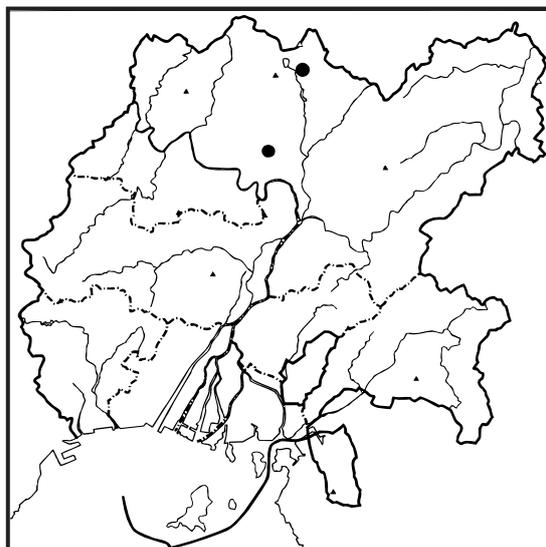
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

テングコウモリ（翼手目，ヒナコウモリ科）

Murina leucogaster

日本を含む極東アジアに分布。体重10～15g，前腕長42～45mm。鼻孔部は管状に突出し，その名の由来となっている。樹洞や^{どうくつ}洞窟をねぐらとし単独でいることが多い。

安佐北区の廃坑，トンネルで確認した。安佐北区が活動域であることは間違いないが，休息場所や繁殖の有無は不明。佐伯郡大野町でも確認されているが少ない。



ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

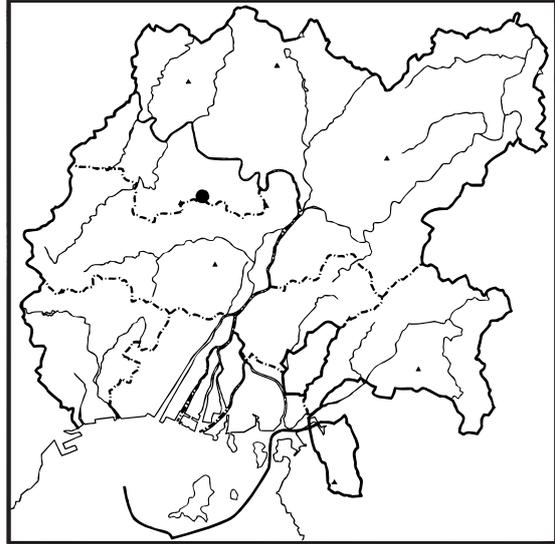
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

コテングコウモリ（翼手目，ヒナコウモリ科）

Murina ussuriensis

全国に分布し，県北部で確認されている。前腕長約30mm，体重4～6g，鼻孔は管状に突き出し，「天狗^{てんぐ}」の名の由来となっている。

広島市安佐動物公園の記録が市域で唯一の記録である。西中国山地で確認されており，安佐北区から安佐南区に生息しているものと考えられるが，生息状況は不明。



ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

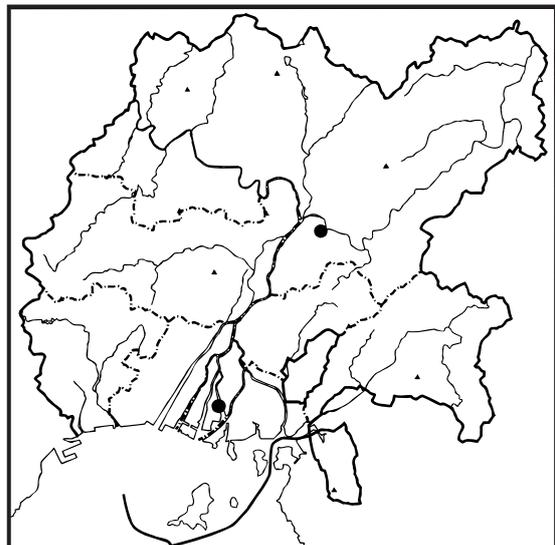
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

オヒキコウモリ（翼手目，オヒキコウモリ科）

Tadarida insignis

1996年に宮崎県で集団ねぐらが発見され，国内で初めて生息が確認された。尾が腿間^{たいかん}膜から長く突き出しており，引きずるように歩くことから「おひき」とよばれる。

今回，中区の校舎で集団ねぐらを確認した。国内で3例目であり，人工建造物の使用例は初めてである。市域全体の状況は把握できていない。



ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

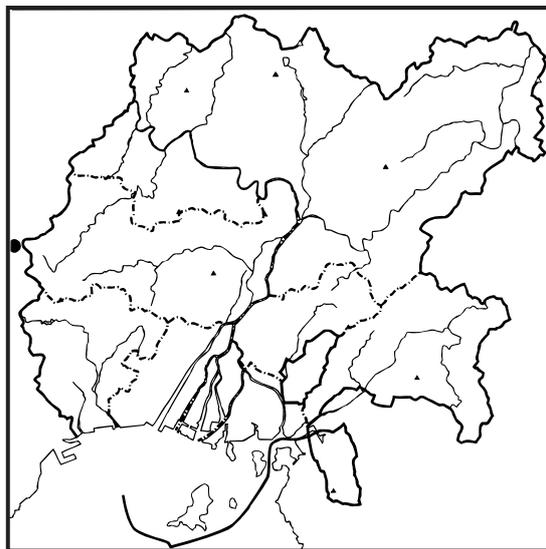
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ニホンモモンガ（げっ歯目，リス科）

Pteromys momonga

本州，四国，九州に分布。頭胴長 140~200mm，尾長 100~140mm。飛膜と扁平な尾を利用して滑空し，木の葉や芽，花，果実，樹皮などの植物を食べる。

安佐南区の東郷山で生息を確認したが生息状況は不明。安佐北区でも確認例がある。ブナやモミなどの大木のある森林の伐採が生存への脅威と考えられる。



ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ヤマネ（げっ歯目，ヤマネ科）

Glirulus japonicus

本州，四国，九州の森林に分布。頭胴長 61~84mm，尾長 40~58mm。淡褐色の背中に黒条がある。

市域では安佐南区の記録が唯一のもので，生息状況は不明。隣接する佐伯郡湯来町から記録されている。



ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

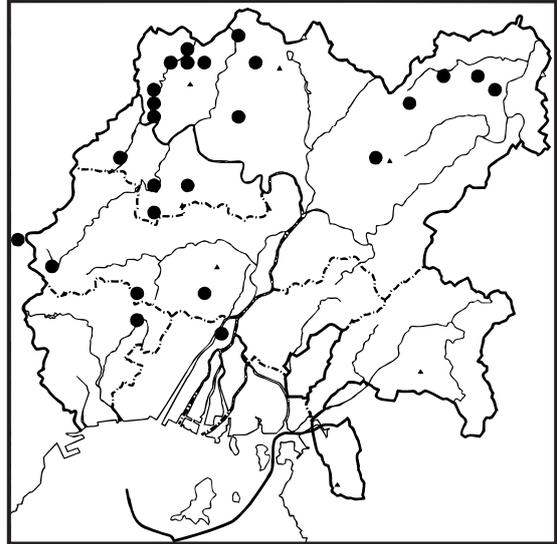
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ツキノワグマ（食肉目，クマ科）

Selenarctos thibetanus

本州，四国，九州に分布する。体長約13m，体重70～80kg。全身が黒または黒褐色で，胸にV字型ないしは三日月形の白斑^{はくはん}がある個体が多い。

広島市の北西部を中心に生息する。まれに市街域に出没し目撃例は多いが，個体数は把握できていない。西中国山地全域を含めた生息状況の把握が必要である。



ほ
哺乳類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

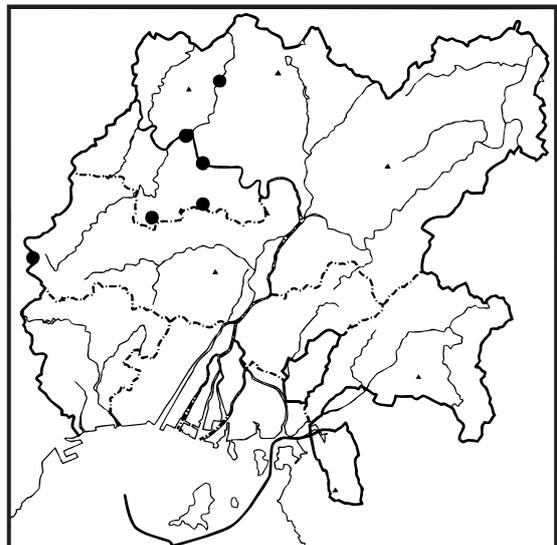
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ニホンイタチ（食肉目，イタチ科）

Mustela itatsi

本州，四国，九州に分布し，南西諸島や北海道には人為的に放され定着している。体は細長く，四肢は短い。オスはメスよりも胴長で最大2倍，体重で5倍あまり大きい。

安佐北区や安佐南区の山あいでは生息が確認できるが，都市化が進行した地域ではみられない。河川護岸のコンクリート化，シベリアイタチとの競合などにより減少している。



ほ
哺乳類

環境指標種

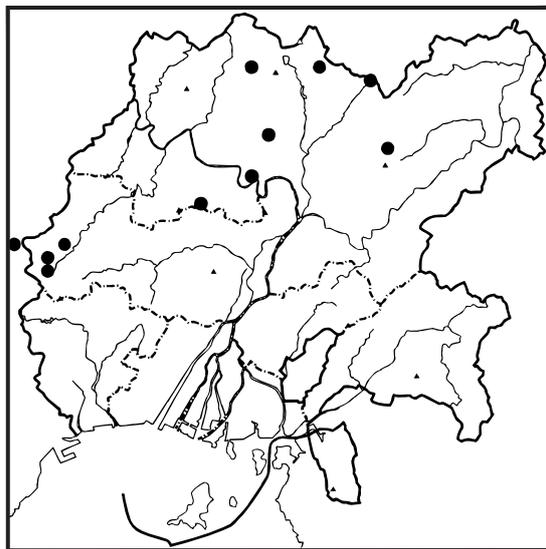
その種に注目することにより重要な自然環境の維持に貢献しうる

ムササビ（げっ歯目，リス科）

Petaurista leucogenys

本州，四国，九州に分布。頭胴長 270~480mm，尾長 280~410mm。滑空のための飛膜が発達している。樹洞や屋根裏に営巣する。木の葉や芽，樹皮などを食べる。

安佐北区と安佐南区の社寺林や民家で確認した。大木の残るまとまった広さの林に生息するが，このような林はしだいに減少している。



鳥類

(現状の解明度)

鳥類は昼行性のものが多いので観察しやすく、また、興味・関心のある人も多く、情報が多いのでその現状の解明は進んでいる。日本鳥学会が1997年にまとめた「日本産鳥類リスト」によると、国内ではこれまでに74科537種が記録されている。

広島県は山林や瀬戸内海などの環境に恵まれ、中国新聞が1998年に発行した「ひろしま野鳥図鑑」(日本野鳥の会広島県支部編)によると58科292種が記録されている。日本野鳥の会広島県支部の記録や今回の調査をもとに、市域から53科278種の鳥類を記録することができた。

(選定候補種の抽出過程)

まず、環境庁及び「広島県版レッドデータブック」掲載種を絶滅・絶滅のおそれのあるものとして取り上げ、調査で得られた分布、生息特性などを考慮して選定要件を判断した。これに加えて、近年個体数が著しく減少している種や、アシ原や干潟などの特殊な環境の指標になる種を選定した。

(現地調査結果)

現地調査は、山林の代表として安佐北区の山林を、河口部の代表として佐伯区八幡川河口と西区商工センター(西部開発事業(臨海部埋立事業)埋立地)を、河川の代表として東区と西区の境界にある太田川の大芝水門付近を、都市公園の代表として中区基町広島城を、里山の代表として安佐北区三入東と飯室を集中的に調査した。のべ213回の現地調査を行った。

今回の調査で、ヤイロチョウの営巣が安佐北区で確認された。これは中国地方で初めての記録である。また、ブッポウソウの繁殖が安佐北区で確認された。ブッポウソウが市域で確実に繁殖しているのはこの1カ所だけである。また、西区でコアジサシの繁殖を確認した。

(選定結果)

25種を選定した。内訳は、広島市の絶滅のおそれのあるもの19種(絶滅危惧2種、軽度懸念3種、情報不足14種)、環境指標種6種である。

「広島市稀少生物調査報告」では、37種が選定されている。このうち、今回の選定種のうち共通している種は、ハチクマ、オシドリ、コアジサシ、アオバズク、アカショウビン、ブッポウソウ、オオアカゲラ、ヤイロチョウ、オオヨシキリ、サンコウチョウの10種である。これらの種は前回の調査以降も希少種としての重要性に変わらない。

猛禽類は、「広島市稀少生物調査報告」ではハチクマのみが選定されていたが、今回は近年の環境変化により猛禽類の減少が懸念されているので、新たにミサゴ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、クマタカ、ハヤブサの6種を選定した。フクロウとコミミズクも同様の理由で選定した。また、留鳥のヤマドリ、旅鳥または冬鳥のダイゼン、ダイシャクシギ、ハマシギ、夏鳥のチュウサギ、ミゾゴイ、ヨタカは、近年その個体数

が著しく減少したので選定した。

なお、学名は「日本産鳥類リスト」(日本鳥学会目録編集委員会 1997)に従った。

(選定しなかった種とその理由)

「広島市稀少^き生物調査報告」で選定された種のうち、今回選定しなかったものは、つぎのとおりである。

アオサギ、アオバト、アメリカヒドリ、イスカ、イワツバメ、オオソリハシシギ、オオルリ、カワセミ、キビタキ、クイナ、クロジ、コクガン、コシャクシギ、ゴジュウカラ、シノリガモ、シロエリオオハム、タマシギ、ツリスガラ、ニューナイスズメ、ノゴマ、ハギマシコ、ヒドリガモ、ホトトギス、マダラシロハラミズナギドリ、ヤツガシラ、ヤマセミ、ワカセホンセイインコ

クイナとタマシギは、近年市街地近郊では確認されなくなったが、周辺地域には生息すると思われるので選定しなかった。また、近年の生息が確認されていないワカセホンセイインコは帰化種のため選定しなかった。シロエリオオハム、マダラシロハラミズナギドリ、コクガン、アメリカヒドリ、シノリガモ、コシャクシギ、ヤツガシラは市域においてはきわめてまれに渡来する迷鳥であり、市域への定期的な渡来はないので選定しなかった。オオソリハシシギ、ノゴマ、ツリスガラ、クロジ、ハギマシコ、イスカ、ニューナイスズメなどは、旅鳥または冬鳥として通過または越冬するが、生息地の環境が保全されていればとくに問題はないと思われるので選定しなかった。同様の理由でキビタキ、オオルリなどの夏鳥や、アオバト、ゴジュウカラなどの留鳥も選定しなかった。アオサギ、ヒドリガモ、ホトトギス、ヤマセミ、カワセミ、イワツバメなどは希少な個体群として前回取り上げられているが、市域においてこれらの種はよく観察され、とくにアオサギは増加、分布拡大傾向にあるので選定しなかった。

鳥類の選定種

広島市の絶滅のおそれのあるもの・絶滅危惧^く

ブッポウソウ

ヤイロチョウ

広島市の絶滅のおそれのあるもの・軽度懸念

オシドリ

ミサゴ

ダイシャクシギ

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

ミゾゴイ

チュウサギ

ハチクマ

オオタカ
 ハイタカ
 クマタカ
 ハヤブサ
 ヤマドリ
 コアジサシ
 コミミズク
 ヨタカ
 アカショウビン
 オオアカゲラ
 サンコウチョウ

環境指標種

サシバ
 ダイゼン
 ハマシギ
 アオバズク
 フクロウ
 オオヨシキリ

ヤイロチョウの繁殖

ヤイロチョウは、南半球に分布の中心があるヤイロチョウ科のなかで、唯一ユーラシア大陸まで分布を広げた種であり、東南アジア、インド、中国、日本、ニューギニア、オーストラリアに分布する熱帯アジア系の鳥である。国内では、本州中部から、四国、九州にかけて夏鳥として渡来する。ヤイロチョウは、繁殖地が孤立しており個体数も減少傾向にあるので、環境庁により絶滅危惧 B類に指定されている。

国内における繁殖の記録は、高知県西部で1937年に営巣が初めて確認され、1965年以後は毎年営巣が確認されている。また、長崎県の雲仙岳や対馬でも営巣が確認されている。中国地方では、広島県佐伯郡湯来町で1991年7月に、島根県飯石郡掛合町で1997年7月にそれぞれ幼鳥が保護されているが、その巣はまだ発見されていなかった。

今回の調査で、中国地方で初めてヤイロチョウの巣が安佐北区で発見された。営巣を確認したのは安佐北区の標高620mの山塊の西側に位置する谷である。谷の両側は傾斜40度前後の急斜面となっており、植生はスギや照葉樹の針広混交林である。巣は谷に面した南側斜面にあり、樹上に置かれていた。ヒナは5羽おり、育雛にはミミズやムカデが多く利用されていた。広島市北部でヤイロチョウが巣作りを開始するのは6月上旬、産卵及び抱卵に入るのは6月中旬、育雛に入るのは6月下旬、巣立ち
 は7月中旬であることが推定された。



ヤイロチョウの幼鳥

(上野 吉雄)

鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・絶滅危惧

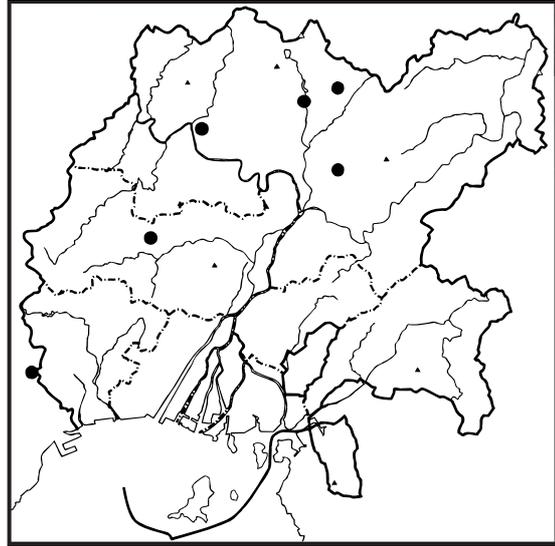
近い将来に広島市で個体群の存続が危ぶまれる

ブッポウソウ（ブッポウソウ目，ブッポウソウ科）

Eurystomus orientalis

夏鳥として九州～本州に渡来する。キツツキがあけた穴などで営巣する。昆虫食。全長29.5cm，青緑色の光沢のある体に翼には目立つ白斑^{はくはん}がある。くちばしと足は赤い。

広島市で確実に繁殖しているのは1カ所だけで，巣箱での繁殖に成功している。樹洞のある木が減少し，個体数が少なくなった。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・絶滅危惧

近い将来に広島市で個体群の存続が危ぶまれる

ヤイロチョウ（スズメ目，ヤイロチョウ科）

Pitta brachyura

夏鳥として東南アジアから渡来し，山地で繁殖する。全長約20cm。雌雄同色で，茶色，黄色，クリーム色，赤色，緑色，コバルト色，黒色で彩られる。

安佐北区で記録があり，繁殖を確認した。繁殖可能な環境が少なく，現在の繁殖地を保全することが必要である。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・軽度懸念

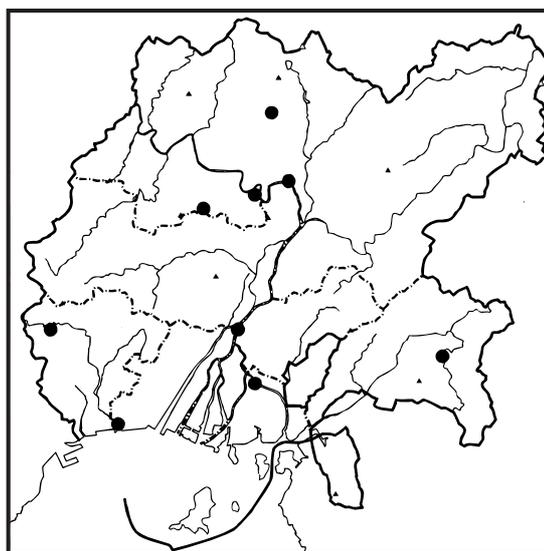
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で存続基盤が比較的安定している

オシドリ（カモ目，カモ科）

Aix galericulata

全国の水辺に生息し，森林の樹洞で繁殖する。河川や湖沼で越冬する。オス全長48cm，メス41cm。オスは橙赤色や青，緑などの色彩とイチヨウ葉型の羽など特徴的。

市域での確実な繁殖記録はない。冬季はダム湖や河川で小群の越冬が見られ，市域の水辺で散発的な記録がある。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・軽度懸念

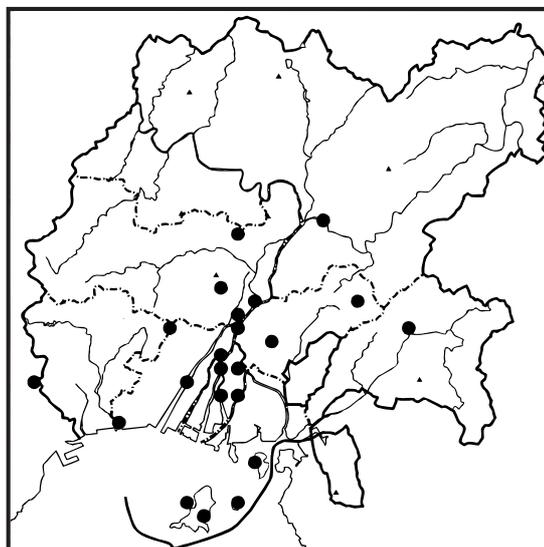
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で存続基盤が比較的安定している

ミサゴ（タカ目，タカ科）

Pandion haliaetus

海岸，河口に留鳥として生息する。魚食。頭部は白く，過眼線が黒い下面が白い大型のタカ。

通年，太田川や八幡川河口，^{やはた}似島などで観察され，山地でもみかけるが，市域での繁殖は確認されていない。繁殖適地が少なく，^{えさ}餌場の減少が懸念される。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・軽度懸念

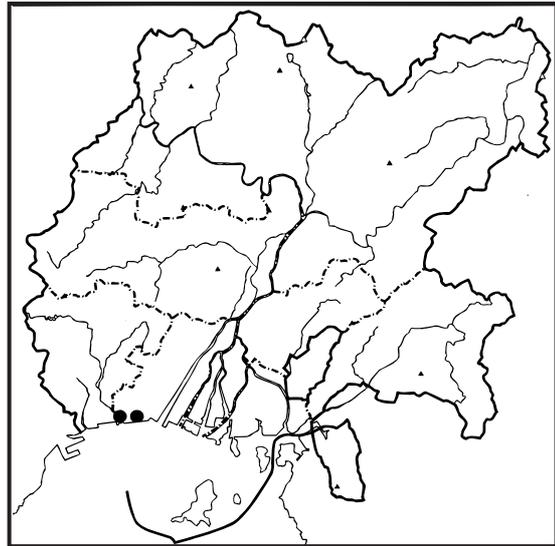
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で存続基盤が比較的安定している

ダイシャクシギ(チドリ目, シギ科)

Numenius arquata

旅鳥または冬鳥として干潟に渡来する。大型のシギで、腹部と腰が白く、くちばしが大きく下に曲がっている。

太田川放水路や八幡川河口でまれに観察されるが、観察回数が少なく生息状況は不明。広い干潟の消失が生存の脅威と考えられる。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

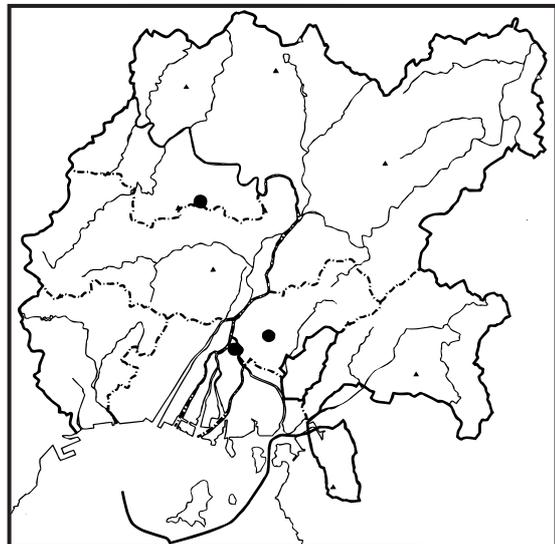
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ミゾゴイ(コウノトリ目, サギ科)

Gorsachius goisagi

本州以南に夏鳥として渡来し、森林で繁殖する。全長45cm。茶褐色で頭部はやや青みがかかり、下面に黒い縦斑がある。夜行性で、カエルやサワガニなどを食べる。

安佐北区で繁殖が確認されており、また旧市内での保護記録もある。観察例が少なく、生息状況は不明。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

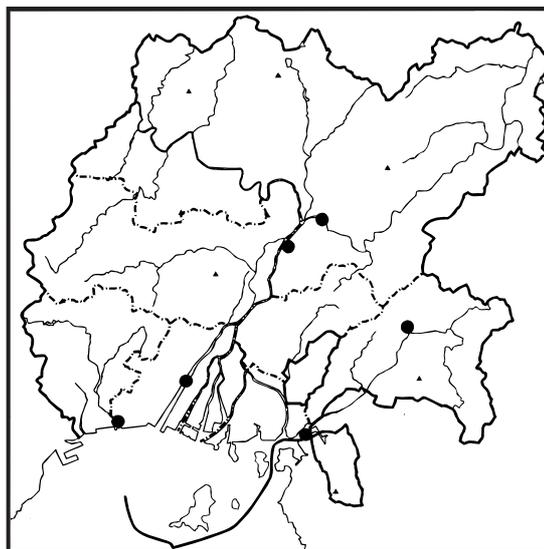
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

チュウサギ(コウノトリ目, サギ科)

Egretta intermedia

夏鳥として渡来し繁殖する。日本南部では冬季残るものがある。短めのくちばしを持った中型の白色のサギ。

春から秋に大芝水門や三篠川^{みささ}などでまれに少数が観察される。市域での繁殖は確認^{えさ}されていない。生息地の水田や湿地で餌となる小動物の減少が生存の脅威と考えられる。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ハチクマ(タカ目, タカ科)

Pernis apivorus

夏鳥として全国に渡来し山地で繁殖する。オスは全長57cm, メスは60cm, 翼開張は120~135cm。カエルやヘビのほか, クロスズメバチの幼虫を好む。

市域での繁殖は確認されていない。春と秋の渡り時期には, 一日に数百羽を数えることもあるが, その増減は不明。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

オオタカ（タカ目，タカ科）

Accipiter gentilis

夏は本州や北海道の山地で繁殖し，秋冬は全国で見られる。全長50～56.5cm，黒色の背中に，横縞のある白色の腹，白色の眉斑よこしまが特徴である。中型の鳥を食べる。

秋から春にかけて多数の記録がある。繁殖は確認されていないが，夏季の記録もあり，繁殖の可能性は十分考えられる。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ハイタカ（タカ目，タカ科）

Accipiter nisus

本州中部以北の山地で繁殖し，冬は全国で見られる。オスは全長31.5cm，黒褐色の背中に橙色の腹だいたい。メスの腹は白色で褐色の横縞よこしまがある。小鳥などを食べる。

冬には多数の記録がある。繁殖は確認されていないが，繁殖期の記録もあり，繁殖の可能性は十分考えられる。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

クマタカ（タカ目，タカ科）

Spizaetus nipalensis

国内に留鳥として生息する。メスの全長は約80cm，翼開張約165cm，オスはメスよりも小さい。上面は黒褐色で，下面は白っぽい。後頭部に冠羽がある。

市域では安佐北区に生息し，繁殖も確認されている。個体数は少ない。営巣に必要な大木のある森林や営巣地周辺の環境を保全することが重要である。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ハヤブサ（タカ目，ハヤブサ科）

Falco peregrinus

全国に留鳥として生息し，^{がけ}崖地などに営巣する。オスは全長42cm，メスは49cm。頭から背面は青黒色で，下面は白っぽく細かい^{はん}斑がある。ほおの^{はん}ひげ状斑が目立つ。

市域での確実な繁殖記録はない。島しょ部などで繁殖している個体が観察されるほか，冬季には市街地でも観察される。営巣地となる^{がけ}崖地の開発や，釣り人による圧迫がある。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

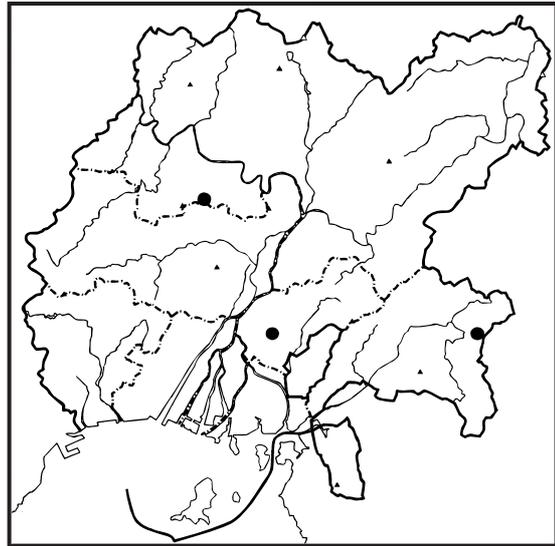
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ヤマドリ（キジ目，キジ科）

Phasianus soemmerringii

本州～九州の林に生息する。オスは尾が長く全長125cmで赤銅色，メスは尾が短く全長55cmで茶褐色。

市内の全域に少数が生息していると思われるが，生息状況は不明。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

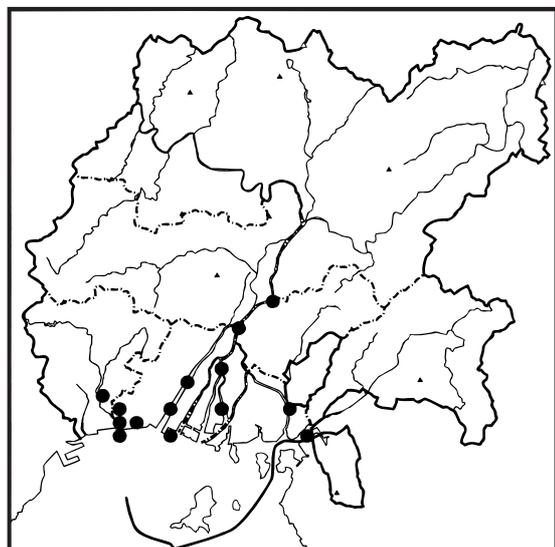
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

コアジサシ（チドリ目，カモメ科）

Sterna albifrons

夏鳥として渡来し，河原や埋立地などで集団営巣地を作り繁殖する。黄色で尖ったとが嘴くちばしをもち，細長いスマートな翼をもつ。水に飛び込んで小魚を捕らえる。

草が生えていない埋立地を利用して繁殖しているので，埋立地の減少に伴い個体数は減少している。人，カラス，トビ，ネコ，イヌ等の侵入により繁殖が妨害されている。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

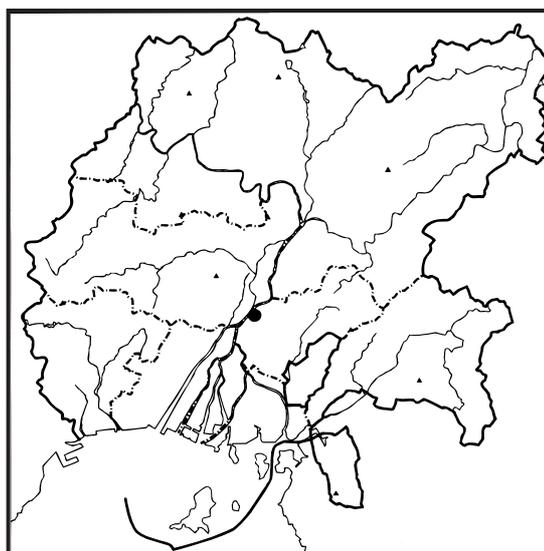
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

コミミズク（フクロウ目，フクロウ科）

Asio flammeus

冬鳥として日本に渡来するが少ない。全長38cm，翼開張99cm。短い羽角がある。上面は黒褐色で黄褐色の斑紋^{はんもん}があり，下面は淡褐色。ネズミなどを食べる。

市域の越冬場所は太田川下流域しかないが，1980年代からほぼ毎年渡来が確認されている。河川改修による越冬地の消失が懸念され，人やイヌなどの圧迫がある。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

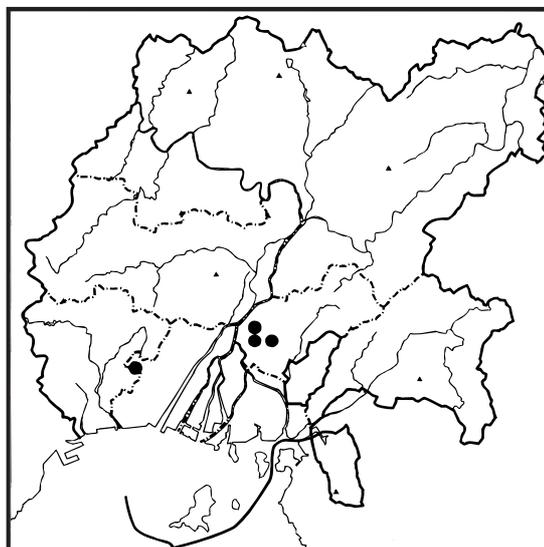
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

ヨタカ（ヨタカ目，ヨタカ科）

Caprimulgus indicus

夏鳥として九州以北の山林に渡来し繁殖する。全長29cm。全体が黒褐色で，褐色や白色の複雑な斑紋^{はんもん}がある。夜行性で，飛びながら昆虫類を捕食する。

1980年代にはかなりの確認記録があり，繁殖の記録もある。しかし，1990年代になると観察例が激減し，個体数の減少を示唆している。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

アカショウビン（ブッポウソウ目，カワセミ科）

Halcyon coromanda

夏鳥として全国の山地に渡来し広葉樹林に生息する。全長27.5cm。ほぼ全身が黄色みを帯びた赤色。樹洞に好んで営巣し、魚やサワガニ、カエルなどを食べる。

県北部での記録が多く、市域では安佐北区や安佐南区の山地に少数が渡来する。最近の報告数は少なく、広葉樹林の消失に伴う餌^{えさ}及び営巣場所の減少で減少している。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

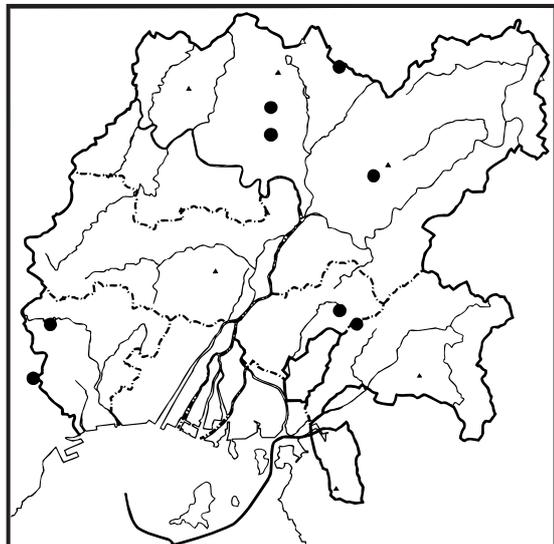
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

オオアカゲラ（キツツキ目，キツツキ科）

Dendrocopos leucotos

北海道から九州にかけて留鳥として生息する。体長約28cm。背は黒く白い横斑^{はん}がある。胸は白くて腹は赤く、脇^{わき}に黒い縦斑^{はん}がある。広葉樹林に生息し、大径木を必要とする。

佐伯区や安佐北区で記録されているが、繁殖は確認されていない。近年生息数が減少しており、落葉広葉樹林の減少が原因のひとつと考えられる。



鳥類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

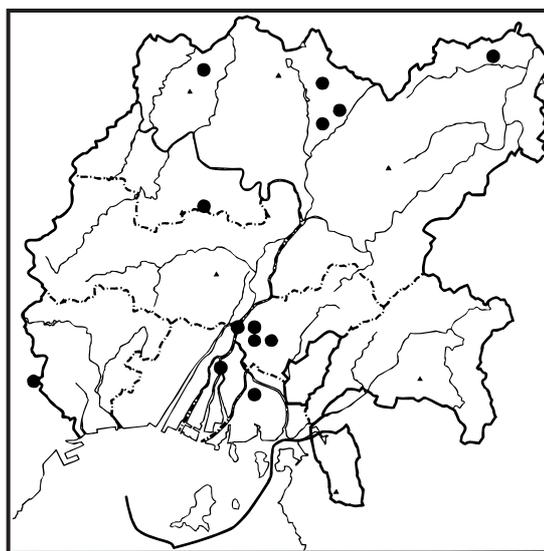
環境庁・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

サンコウチョウ（スズメ目，カササギヒタキ科）

Terpsiphone atrocaudata

夏鳥として東南アジアから渡来し，山地で繁殖する。オスは全長44cm，長い尾が目立つ。背中が紫褐色で腹は白色，目の周りはコバルト色。

安佐北区や東区で繁殖が確認されているが，個体数は多くない。暗い林を好むため，森林伐採などの影響を受けやすく，野鳥愛好家の圧迫もある。



鳥類

環境指標種

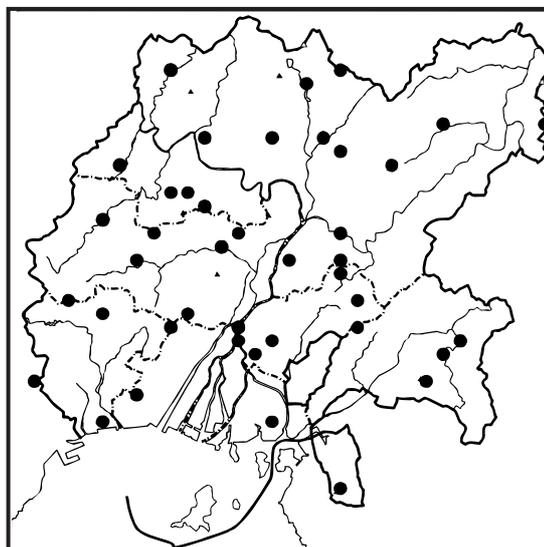
その種に注目することにより重要な自然環境の維持に貢献しうる

サシバ（タカ目，タカ科）

Butastur indicus

夏鳥として日本に渡来し，山林で繁殖する。全長約50cm，翼開張約110cm。上面は褐色，下面は白く，胸と腹に褐色の横斑がある。ヘビやカエル，昆虫類などを食べる。

市域でも繁殖が確認されているが，個体数が減少している。山林の開発と餌となる小動物の減少が原因と思われる。



鳥類

環境指標種

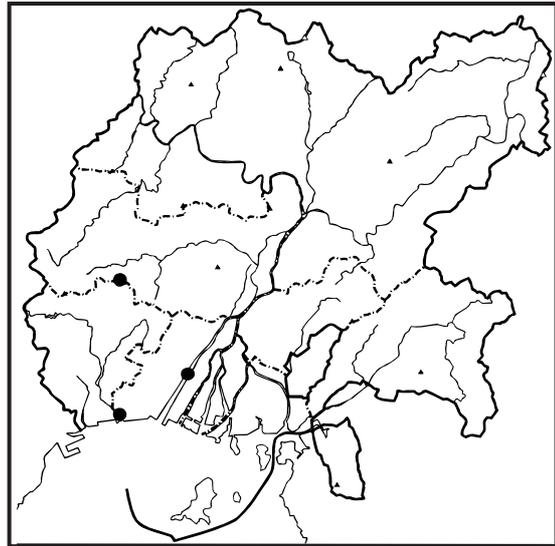
その種に注目することにより重要な自然環境の維持に貢献しうる

ダイゼン（チドリ目，チドリ科）

Pluvialis squatarola

旅鳥として河口や干潟に渡来する。大型のチドリで，夏は下面の羽が黒い。

やはた八幡川での観察がほとんどで，以前は毎年数羽の越冬が確認されていたが，近年越冬の記録はない。干潟面積の減少が原因と考えられる。



鳥類

環境指標種

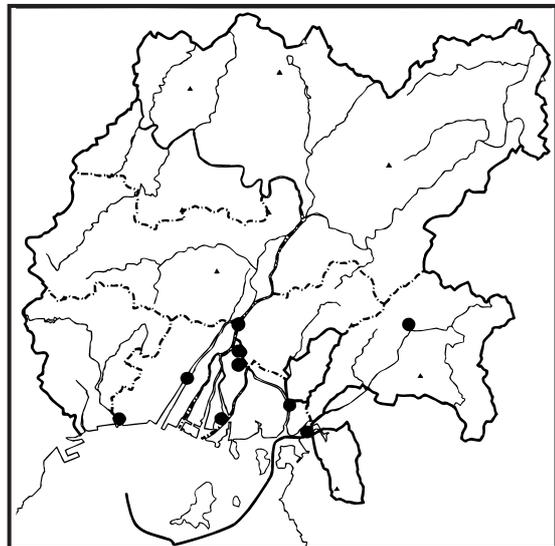
その種に注目することにより重要な自然環境の維持に貢献しうる

ハマシギ（チドリ目，シギ科）

Calidris alpina

冬鳥及び旅鳥として干潟に渡来する。やや長めの嘴をもつ小型のシギで，夏の腹の色は黒色，冬は白色。多数の群れとなって干潟で餌をとる。

以前は数百羽の群れが観察されたことがあるが，近年，個体数が減少している。干潟面積の減少が原因と考えられる。



鳥類

環境指標種

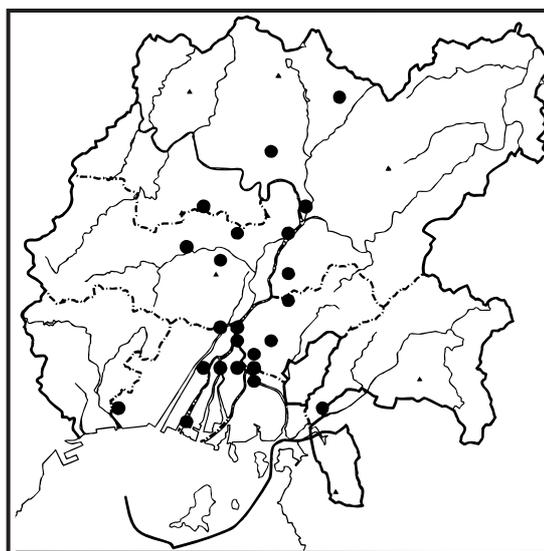
その種に注目することにより重要な自然環境の維持に貢献しうる

アオバズク（フクロウ目，フクロウ科）

Ninox scutulata

夏鳥として日本に渡来し，山林で繁殖する。全長27～30cm，体は黒褐色で目は金色。コウモリ，昆虫などを食べる。

市域では安佐北区や東区で繁殖が確認されているが，長年繁殖していた場所で繁殖しなくなった例も増えている。営巣している木や建物の保全が重要である。



鳥類

環境指標種

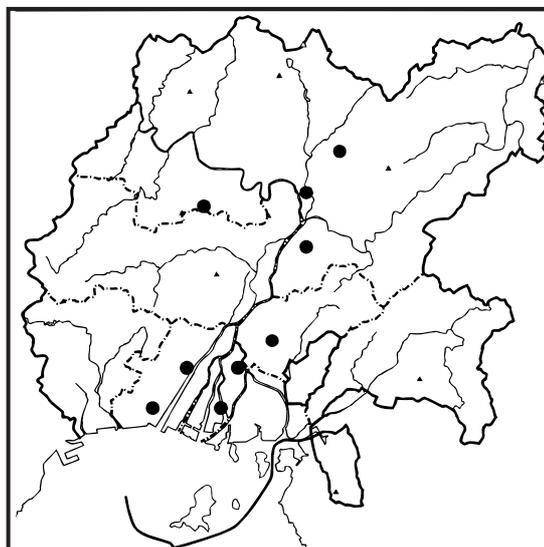
その種に注目することにより重要な自然環境の維持に貢献しうる

フクロウ（フクロウ目，フクロウ科）

Strix uralensis

九州以北で留鳥として生息し，大木のあ
る山林に住む。全長48～52cm，耳羽はなく，
体には灰白色，黒色，褐色の複雑な斑紋が
ある。ネズミや小鳥などを食べる。

市域中心部に近い山でも観察されている
が，繁殖記録は少ない。繁殖には大きな樹
洞が必要であるが，大きな樹洞を持つ大木
が減少しているので，繁殖個体の減少が懸
念される。



鳥類

環境指標種

その種に注目することにより重要な自然環境の維持に貢献しうる

オオヨシキリ（スズメ目，ウグイス科）

Acrocephalus arundinaceus

夏鳥として東南アジアから渡来し，アシ原で繁殖する。全長18.5cm，オリーブ褐色に白色の眉斑^{びはん}がある。ギョギョシケケシと騒がしく鳴く。一夫多妻の繁殖形態を持つ。

太田川沿いには大きなアシ原が残っているため近年も記録があるが，八幡川河口^{やはた}では1986年以降記録がない。アシ原の消失が原因と思われる。

